

## 埋もれゆく歴史と記憶を掘り起こす : 三つの事例を通じて

横谷, 奈歩

<https://hdl.handle.net/2324/7419067>

---

出版情報 : Bulletin of the Musashino Art University. 52 (1), pp.229-235, 2022-03-01. Musashino Art University

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



# 埋もれゆく歴史と記憶を掘り起こす

—三つの事例を通じて—

横谷 奈歩（非常勤講師 / 油絵学科油絵専攻、現代美術）

## Unearthing Buried Histories and Memories

—Analyses of Three Cases—

YOKOYA Naho

あらかじめ公的な歴史資料や文献等で知られた歴史的事実と平行に、埋もれてしまった、あるいは埋もれゆく歴史が各地に存在する。ここでいう埋もれゆく歴史とは、一個人の記憶や土地（場）、その周辺に関わる人々と共に存在するが、大きな話題性や人の目に触れる機会が乏しく、そして記録を成す外部的目線が介在しないが故に、歴史的事実をどのような形で残すかの判断が容易でないため、将来的には消滅してしまう可能性を持つ歴史や記憶である。

近年、美術家が文化人類学的アプローチで作品制作を行う例を多く見かけるが、それだけ人類学や民俗学のアプローチと美術的アプローチには親和性が高いことが考えられる。イギリスの社会人類学者、ティム・インゴルド（Tim Ingold）の著書『人類学とは何か』の言葉を引用すると、「知識の進歩の上に打ち立てられる世界において、さまざまな研究者たちの間にあって人類学者が特別なのは、他の学では、教育のない、文盲、それどころか無知と簡単に片付けられてしまう人々から進んで学ぼうとするからである。こうした人々の声は、主要なコミュニケーション・メディアで取り上げられることはほとんどなく、人類学者がいなければ聞かれることがないままであろう。人類学者たちが幾度となく示してきたように、こうした人々は、彼らよりも知識があるとされている優れた者たちよりも知恵がある<sup>(註1)</sup>。」

引用文中の「人類学者」の箇所は、そのまま「美術家」に置き換えてもあてはまるのではないかと。著者は、第1章のタイトルを「他者を真剣に受け取ること」としているが、リサーチやフィールドワークを用いて制作する美術家も、他者の存在を人類に限定しない世界のさまざまなものへと置き換えて「真剣に」受け取っているのではないかと。そして私たちは、無名の人々の埋もれゆく歴史や知恵から、世界や生き方を学ぶ機会を与えられているのではないかと。上記の好例として、武蔵野美術大学には民俗資料室があるが、故宮本常一教授の軌跡ともいえる収集物が並ぶ。2021年5月、私は学部1年生の担当授業の一部を民俗資料室にて行わせてもらったが、収集物には、用途や地域な

ど条件によって様々な異なる形が存在し、膨大なコレクションとなっていることに興奮を隠せなかった。市井の人々が使用していた道具一つ取っても、目的に沿ってこれだけ多様なかたちやつくりの表現があるさまは、驚異とって過言ではない。日本の民具という限られたコレクションの一端からも、私たちは世界を想像することが出来る。

「埋もれゆく歴史と記憶を掘り起こす」ことを念頭に、私が携わる現在進行形の三つのプロジェクトは、その過程で発生する事象もすべてアーカイブとして重要な位置付けとなる。そして未来の人々がプロジェクトの現場で起きた生々しい、リアルな記憶の掘り起こしの瞬間を出来るだけ追体験出来るように、スケッチやドローイング、模型、音声、写真、映像、テキスト、聞き取り、マップ化等の多様な方法で記録している。私は研究報告として、フィールドワーク、リサーチを通じた三つのプロジェクト事例とそのプロセスをまとめ、美術家が行う「埋もれゆく歴史と記憶を掘り起こす」試みを、その意味も含めてあらためて考察する。

### 1. 星劇団再演プロジェクト

一つ目の事例は、2013年より広島県尾道市、吉和を舞台に、第二次世界大戦の終戦直後に女性たちが立ち上げた劇団、星劇団の再演プロジェクトである。当時の元劇団員や関係者の多くは逝去され、その記憶が穴となる中、残された事実の聞き取りと地域の社会的、文化的背景に関するリサーチを進めながら、2022年3月に再演を行う。再演後には、地域の小学校の空き教室を使用し、地域の宝を収める郷土資料館の制作を進めている。

#### 1-1. プロジェクトのはじまりとこれまでの経緯

尾道は、2013年夏のアーティスト・イン・レジデンス、AIR Onomichi<sup>(註2)</sup>の招聘により初めて訪れ、今では“おかえりなさい”とたびたび声を掛けられる場所になった。その年の12月初め、私は尾道市立大学の学生と吉和



写真1：星劇団の集合写真（1946年）。川原ヤエ子さん宅アルバムより寄贈

地区にある川原ヤエ子さんのお宅を訪ねた。吉和はかつて家船<sup>註3</sup>が停泊した歴史の古い吉和漁港があり、周辺は漁師町で、吉和の地域住民が海側／山側と分ける山側に位置する軒家に、当時 89 歳になられたヤエ子さんは一人で暮らしていた。私は、学生から、家船に関する聞き取りに誘われ、同行するかたちになったが、ヤエ子さんは海側の生活とはほぼ関わりがなく、税務署の電話交換手として働き、一男一女を育てたキャリアウーマンの走りのような人だった。その日は家船の話の代わりに戦中戦後の話を伺い、話の中で初めて私は星劇団と出会った（写真1）。

ヤエ子さんの証言によると、第二次世界大戦後、吉和漁港の北側に位置する尾道商業高校は進駐軍の駐屯地となっており、校庭には空缶が散らばっていた。捨てられた缶の星マークの部分を取り取り、5つのうちの1つの角を折り曲げて暗幕に引っ掛ける。公演中に幕が揺れると、それはあたかも舞台上でたくさんの星がきらめく風景のようだったという。つまり戦後の物資が不足する世の中、彼女たちは舞台の装飾に進駐軍の空き缶を利用し、星に見立てたことで、劇団名を星劇団と名付けた。星劇団は、昭和21年から吉和地域を舞台に、大阪松竹歌劇団付属学校<sup>註4</sup>から戻って来た浜中初恵さんと川原ヤエ子さんを中心となり、当時10代から20代の女性たちが約10年間、公演活動を

した。郷土史家の財間八郎氏が後見人となり、市役所の青年団が後援についていたという。彼女たちは衆楽座という吉和にあった劇場を中心に、小学校や刑務所での慰問公演をおこなっていた。衆楽座の建物は、昭和35年に火事で焼失し、今では民家が建ち並ぶ。ヤエ子さんが星劇団の思い出を綴った3枚に渡る手記には、娯楽のない時代、公演を行った際の熱気や興奮、刑務所への慰問公演について書かれている（写真2）。

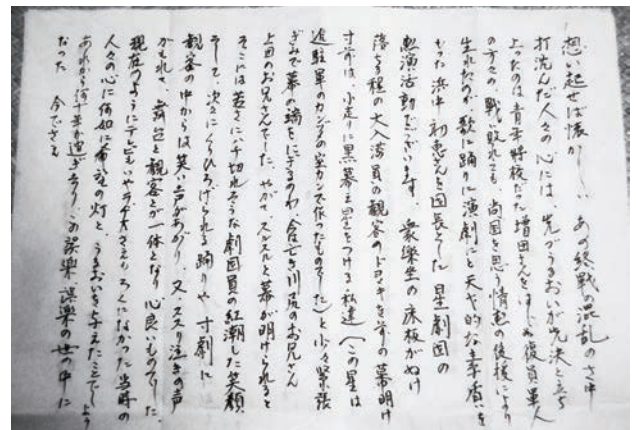


写真2：川原ヤエ子さんによる手記

星劇団に関するリサーチとフィールドワークは、AIR Onomichi ディレクターで自身も美術家であり、尾道市立大学教員の小野環氏を伴走者として、学生を含む有志の再演メンバーたちと地域住民の方の協力を得ながら、星劇団や吉和地域の歴史等、周辺や背景についても調査を進めた。進めるうちに、吉和地区は家船の歴史や戦後の「荒っぽい」漁師たちの生活からなのか、地域住民への聞き取りからは被差別の歴史が浮かび上がる。外部の人間である私は、フィールドワークの際に混み込んだ吉和の路地を歩き回るのにも躊躇があった。それは恐怖心というよりも、地域の閉じられた歴史や見られたくないプライベート空間を覗き見るような、この地域の歴史を紐解いていくと同時に起きた感覚でもある。長い時間をかけながら、尾道市史編さん室の林良司氏、肥田伊織氏、吉和地区の民生委員で町内会長を務める山根基嗣氏、吉和出身の元尾道市人権文化センター職員の砂田信行氏らの協力を得て、少しずつ星劇団の状況や時代背景が明らかになってくる。そしてこの地域の歴史は深く、人々は誇り高く、入るほどに温かく迎え入れてくれる場所であることも、感じられるようになった。

### 1-2. フィールドワーク、リサーチ方法について

再演に際し、私たちは過去の人々の記憶の中にある星劇団を理解し、自分たちの中でリアリティある存在まで育てるために、さまざまな方法でのリサーチやフィールドワーク、そして意見交換のための研究会を重ねた。星劇団というある時代の断片の事象を調べるだけでなく、劇団が生まれ育った吉和地区の時代的、社会的背景を含めた広範囲からのリサーチを行なった。そのリサーチの主な例を以下に示すと、

- ・川原やエ子さんへの聞き取り（2013年～2018年）
- ・星劇団があった当時の吉和を知る方、出演者等への聞き取り（2017年～現在）
- ・尾道市人権文化センター訪問（2015年）
- ・有志メンバーとの町歩き（2015年～）
- ・周防大島の宮本常一記念館における調査（2016年7



写真3：星劇団プロマイド写真（故石田光正氏所蔵）

月）<sup>(註5)</sup>

- ・吉和地域の回覧板、町内会での説明等から地域への周知（2017年）
- ・連続研究会、座談会（2018年～現在）
- ・大林映画の舞台美術担当者（尾道在住）等、専門家への再演に関する技術的な相談

上記の聞き取りの文字起こしや、内容から連鎖した時代背景等の調査、町歩きから当時の風景のドローイング、地図の作成等の制作が並行して行われた。

### 1-3. 制作した3冊の記録冊子について、アーカイブの重要性

このプロジェクトで発行した3冊の記録冊子は、冒頭の章でも少し触れたが、プロジェクトのプロセス自体が成果物、アーカイブとして重要な位置付けとなるため、未来の人々が現場を出来るだけ追体験出来る形を念頭に制作した。1冊目は、それまでのリサーチで判明した星劇団の基本情報と経緯について、2018年に発行。2冊目は「わたしの星劇団」というタイトルで、携わる多彩なメンバー（学生、市役所職員、地域住民、歴史家、美術家等）に文章を依頼し、2020年3月に発行した。星劇団という一つのテーマと事実を追いながら、立場や年齢が違えば見えている景色は一つではない。その異なる景色を共有し、記録するためにも、それぞれの言葉で星劇団について綴ってもらうことは、再演の制作に必要な過程であった。そして、コロナの流行により2020年秋に予定していた再演は延期、人に会わず自宅にこもることが増える中で3冊目を制作し、2020年10月に発行した。コロナ禍における制限された社会状況は戦時下を想起させる時があり、3冊目は「わたしのコロナ禍」というタイトルで、メンバーが体験したコロナ禍と、コロナ禍の期間に星劇団関係、日本、世界で起きたことを年表化したもの、そして少し感染が落ち着いた期間を狙って、メンバーでプロマイド再現写真を制作し、掲載した（写真3.4）。



写真4：プロジェクトメンバーによる、プロマイド再現写真（2020年）

#### 1-4. プロマイド写真の再現撮影

2019年秋、協力者の一人である砂田信行氏から、星劇団のプロマイド写真がスキャンされたアルバムデータが送られてきた。当時、星劇団の世話をし、自らも出演した石田光正氏が所蔵していたアルバムである。綺麗にアルバムに整理された写真を元に、背景の山の稜線などから当時の撮影現場を割り出し、衣装や小道具を合わせて再現撮影を行った。その作業と映し出された写真の数々は、75年前の写真に写る人々と私たちを繋ぐ行為であり、イメージとなって映し出された。

#### 1-5. 最終的なアウトプットの形態としての再演

星劇団再演プロジェクトにおけるアウトプットとして、現代のプロジェクトメンバーによる再演がある。実際の星劇団に出演していた方の聞き取りを元に、私たちは現代に再演する意味や形について、研究会で議論を重ねた。再演までに時間が掛かったのは、存命中の方で星劇団の存在を知る人があまりにも少なく、また60-70代となる子ども世代も、今回の私たちのリサーチによって星劇団の存在を初めて知った方が多くいた。聞き取りの過程において、人間の記憶の不確かさについても、脳内のどこかに置き去りにされた事実を周辺が掘り起こすことで、眠っていた記憶が連鎖的に起こされるさまを何度か体験した。

そして2021年8月現在、私たちは星劇団の再演に向けて準備をしている。具体的には、会場となる吉和小学校の校庭に衆楽座と同サイズの劇場を再現し、公演を行う。第一部は、星劇団の成り立ちについての演劇、脚本は尾道市史編さん室の肥田伊織氏、林良司氏が、時代考証を含む執筆を担当し、演劇の仕事を目指する尾道市立大学の学生が演劇仕立てにまとめた。第二部は、オリジナルの星劇団が行っていた演目を元に、歌や踊りで構成したレビューである。ゲストとして、パフォーマーでありアーティスト集団Dumb Typeに所属する砂山典子氏が、主に吉和地域の子どもたちと出演者にワークショップを行う。世界的なパフォーマーと吉和の土地や人々との出会いから、どのような化学反応が生まれるのか。また、子どもたちに星劇団を含めた郷土学習を行うことが予定されているが、吉和フィールドワークを経たダンスワークショップはこの地域の記憶の一つの継承のかたちとも言えるだろう。また再演以後、吉和小学校内の空き教室を利用し、星劇団を含めた地域の宝を取める資料館作りも、山根基嗣氏を中心に進めている。

## 2. インドネシア、日本統治下の歌と記憶のリサーチ

二つ目の事例として、第二次世界大戦時に日本統治下で少年時代を過ごしたインドネシア男性の記憶を元にした「歌」に関する制作をあげる。

#### 2-1. ジョグジャカルタでの出会いとこれまでの経緯

2019年3月、美術家の横内賢太郎氏が主宰するArtist Support Project<sup>(註6)</sup>のアーティスト・イン・レジデンスの企画によって、私はインドネシアのジョグジャカルタにあるLanggeng Art Foundationに1ヶ月滞在した。到着した翌朝、早くに目が覚めてしまい、既に動き出す街中に出ようとした際、玄関前を偶然通りかかった隣の修道院の婦人に片言の英語で話しかけられた。私たちは修道院で朝食を食べた後、彼女は「あなたに会わせたい人がいる」と路地の奥にある一軒の家に私を連れて行ったが、そこがリカルド・スハルディ(Ricardo Suhardi)氏の自宅だった。リカルド氏は1932年生まれで現在も王宮の図書館員として勤務し、かつては王宮の音楽家、通訳でもあった。彼は日本人である私を見ると、数々の日本語の歌や単語で話しかけ、私はその歌声に魅了された。会話の中で彼が正確な歌詞と意味を知りたいと言った「やえしおの」で始まる歌があったが、他の歌曲とは異なり、ネット上で調べてみても全く情報が出てこない。私はリカルド氏の言葉の断片を元に、日本近代史に造詣が深い東京の画廊、かんらん舎の大谷芳久氏にメールをしたところ、次の日、大谷氏から、その歌に関して書かれた論文が送られてきた。論文は「八重潮」について書かれており<sup>(註7)</sup>、その歌曲は、日本統治下のインドネシアで一般市民からの公募により選ばれた合唱曲であった。私は早速リカルド氏に歌詞と内容を画用紙にローマ字で大きく書いて伝えると、彼はとても喜んだ。そして私は、「八重潮」と、その時代背景を更に深く知るため、論文の著者である丸山彩氏に連絡を取り、情報交換を続けたところ、私が次回渡航する2019年8月に丸山氏の調査の手伝いをする流れになり、リカルド氏は5枚に渡る彼の少年時代に関するレポートをまとめて上げた。それは彼の人生に関する貴重な証言だった。ここに一部を紹介する<sup>(註8)</sup>。

「私の初等教育：H.I.S (Hollands Inlandsche school)、オランダ政府の家族の子供のための小学校、公務員のみ。日本軍が1942年7月にジョグジャカルタに到着した時、私はA学年でした。オランダ政府が支援するすべての学校は閉鎖されなければなりませんでした。それから私はKAPAMAという名前の公立の学校に入りました。1941年と1942年のクラトン(ジョグジャカルタの王宮)・ジョグジャカルタ発行の何かの雑誌を読んだとき、カバマという学校が存在したことを除いて、今日まで私が[カバマ]の意味を知らないのはとても奇妙なことです。その教育システムは半分は軍事的であったように、今の私は思います。そこは日本の軍事占領下、ジョグジャカルタのよく知られた公立学校でした。1942-1945年のジョグジャカルタでの私の学校生活は、毎週月曜日に[フラッグセレモニー]があり、生徒たちは日の丸に敬礼し、君が代を歌いました。現在、私は君が代と他のいくつかの古い日本の歌



写真5：2019年8月訪問時のリカルド・スハルディ氏

を歌うことができます。八重潮、海ゆかば、肩を並べて、など」(写真5)

その後、私はコロナ禍で海外への渡航が出来ない中、リカルド氏が執筆したレポートを翻訳し、当時の時代背景とレポートの風景からイメージした写真作品を模型から制作し、彼との出会いのストーリーと合わせ、一つの冊子に収めた。そのアーティストブック『親愛なるあなたへ』は、現在、共同調査をした丸山彩氏が所属する立命館大学の国際平和ミュージアムに所蔵されている。

### 2-2. 海外渡航ができず、制限の中で広がるリサーチ

インドネシアのリカルド氏との出会いから広がり、同時期に日本では何が起きていたのか、個人史レベルでのリサーチを2020年より開始した。沖縄は私のリサーチ場所の一つであるが、個人の記憶を継承する試みの例として、参考になる博物館がいくつかある。例えば、ひめゆり平和祈念資料館の第4展示室のテーマは「鎮魂」となっている。沖縄戦で亡くなった生徒と教師の遺影とともに、生前どのような人物でどのような状況で亡くなったのか、個人に焦点を当てながら、彼、彼女らが生きた証を浮かび上がらせ、「沖縄戦」という言葉に集約させるのではなく、亡くなった一人一人に想いを馳せることが出来る。沖縄戦で亡くなった生徒も教師も、星劇団のメンバーも、日本統治下のインドネシアで攻撃の練習をしていたリカルド少年も、生まれ育った土地や環境は異なるものの、年齢はそれほど変わりがなかった。公的な機関においても、こうした個人の記憶や物語を残すアーカイブが増え続けて欲しいと願いながら、同時に私もアーティストの立場でリサーチと制作を継続したい。

### 2-3. 今後の課題について

最近、リカルド氏から送られてきたメッセージには、彼が歌ってくれた日本の軍歌「海ゆかば」の意味と内容を知りたいと書かれていた。しかしながら「海ゆかば」の歌詞の意味を調べると、当時、第二次世界大戦における戦死を

称える軍歌、鎮魂歌に読み取れる歌詞に戸惑い、私はまだ彼に内容を伝えられていない。そして、映画「アクト・オブ・キリング」にも描かれた、1965年に起きたインドネシアの9.30事件に端を発した市民による共産主義者への集団虐殺についても知ることとなり、被害者は同時に加害者にもなりうる可能性についても考えざるを得ない。また、こういったリサーチや取材には、インタビュー対象者への搾取の問題も常につきまとうが、自らの調査や制作行為に対する問いかけは毎度のことである。今後、歌のリサーチと収集を、丸山彩氏との共同調査としてインドネシアを含み日本へも枠を広げて開始する計画だが、上記に挙げた点は、この制作における課題である。

## 3. 高松市塩江町におけるプロジェクト

三つ目の事例として、高松市塩江町におけるプロジェクトを挙げる。

### 3-1. 高松市塩江町について

塩江町(しおのえちょう)は、昭和31年に塩江村、安原村、上西村の3つの村が合併し、誕生した町で、2005年に高松市へ編入合併し、高松市塩江町となった。戦前には、塩江温泉鉄道<sup>(註9)</sup>と花屋旅館に代表される温泉観光地として繁栄したが、今では典型的な少子高齢化、過疎化に悩まされ、1960年代には7000人近かった人口も、現在は2600人まで減少し、2030年代初頭には1000人を切ると予想されている。実際に近年の小学校入学者数は一桁になり、こども園入園者数はさらに少ない。

### 3-2. プロジェクトのこれまでの経緯

プロジェクトは2020年秋から本格的に塩江町で開始し、私はメンバーの一員として携わっている。はじめは2018年12月、旧知の友人から“面白い人”が塩江で何かを起こそうとしているので紹介したいと言われ、ふらりと塩江町を訪ねたことがきっかけである。そして2018年の東京都美術館のグループ展に参加したメンバーに声をかけ、2019年4月に塩江町にて最初のフィールドワークを行った。その後は、先行事例の視察や助成金申請などを行い、塩江でのプロジェクトをどのように形作るか検討を重ね、2019年暮れには塩江町民向けの紹介と説明会の場を持った。そして2020年4月より本格的にプロジェクトを開始予定だったが、コロナ禍により現地との往来が滞り、遠隔でのウェブミーティングを重ねた。

2021年8月現在、関わるメンバーは流動的ではあるが、軸となっているのは、塩江地域の人々を中心に、地域おこし協力隊を退任後、塩江町で一般社団法人トピカを立ち上げ、代表として塩江に在住する村山淳氏、元香川県庁

地域おこし協力隊所属で空間デザイナー兼地域プロジェクトのコーディネートを手がける神高伸江氏、塩江町地域おこし協力隊で、デザイナー、ワークショップ講師なども行う相曾晴香氏、招聘メンバーは、文化人類学者として狩猟採集民の研究をする服部志帆氏（天理大学）、美術家としての活動の他に、尾道市空き家再生プロジェクトにも所属する小野環氏（尾道市立大学）と、美術家の私がおり、他に専門技術や知識を持った、現場でワークショップを行うゲストが参加する。さまざまな背景を持つメンバーが揃うが、特に一橋大学での大学院時代に歴史・言語学を専攻し、ラテン語やゲール語などの現代では一般的に使用されていない言語について知識が深く、即物的でない知識や行為が長年の時間の経過において価値を維持することを、本質的に理解している村山淳氏が受け入れ側の代表になっていることは、プロジェクトにとって大きい。やはり共同プロジェクトにおいては、地域の歴史や場の面白さに加え、今そこにいる「人」のユニークさは、後にも先にも非常に重要なのではないか。

### 3-3. ここで私たちは何を行うか。異分野との協働事例

開始したばかりの私たちのプロジェクトの中心には、塩江町上西地区の1軒の空き家を舞台としたアーカイブルーム「いにしによる」<sup>(註10)</sup>がある。かつての住人であった家族の記憶を含めながら、塩江の個人の歴史と現在が入り混じる「場」を、地域の方と共に文化人類学者と美術家の共同作業で再構築しながら制作を行なっている。文化人類学者の服部氏が、空き家で誕生し、40歳頃までを過ごした現在の持ち主でもある藤川剛氏に家自体や家族の歴史、藤川家に残された物品にまつわるエピソードを丁寧に聞き取りし、空き家の特徴を生かしながら、体験型アーカイブへと変貌させている（写真6）。また、「いにしによる」の一室には、近隣地区の内場ダムの底に沈む今はなき集落の風景を、聞き取りを元に巨大な模型で再現する準備を行っている。

同時に現地では、メンバーそれぞれの関心からリサーチや制作を進めているが、私は花屋旅館に属し、太平洋戦争



写真6：藤川邸での「いにしによる」制作風景（2021年）

直前の昭和15年まで「四国の宝塚」として活躍した塩江少女歌劇団に関する聞き取りを行っている。また、かつて讃岐の奥座敷と呼ばれた山間地域の塩江は、自然も食材も豊富で、その食材を自由自在に扱う地域在住の方の料理は無形の財産の一つである。2021年春には、地域の和田佐登子氏、藤川美智子氏にお願いして食のワークショップを行なった。参加者は、内場ダムの底に沈んだ風景を思い出しながら、それぞれのプレートにかつての繁栄した街並みのように食材を飾り付け、話をしながら桜の樹の下で皆で食した（写真7.8）。

文化人類学者や生物学者といった、異分野の研究者と共同調査や制作をすると、それぞれの専門分野と得意分野を意識せざるを得ない。例えば私が調査に同行した虫博士には、虫の柄や形だけでなく、美術家の私には気づかないコロニーが見えているし、文化人類学者も同様に、目に見えるものの更に奥にある背景が見えている。美術家のフィールドワークには、視覚的な情報に留まらず、簡単に言語化することができない身体を通じた調査があり、それは時間を経て解釈され、多様な形のアウトプットに置き換えられる。したがって、研究者目線で過去のデータから導き出す掘り下げられた考察と、感覚を研ぎ澄ませながらその場を



写真7：旧上西小学校にて、食のワークショップ調理風景（2021年）



写真8：食のワークショップ盛り付け風景（2021年）。各自のトレイには、先に基本食材が並んでおり、好きな食材を選んでトッピングする。

体感する美術家が協働することによる異分野の共同調査には、複眼的な視点と考察が可能となり、相互の範囲を超えたりサーチとアウトプットの場を創出することが可能になる。

塩江のプロジェクトでは、地域の方たちと丁寧な対話を心がけながら、様々な方法で記憶の掘り起こしを行い、塩江の現場で文化人類学者や美術家に出来ること、そして専門分野の協働によって広がるアウトプットの可能性をじっくりと探っている状況である。

#### 4. まとめとして

歴史は、考古学の遺物のように、有形で目に見えるものだけではなく、記憶や人、技術など無形のもが存在する。埋もれゆく無形の歴史の価値を、美術家が具体的な事例 — 作品として残すには、どのような形が適するのか。これまでいくつかのプロジェクトを実践しながら、その都度、出来るだけ現場で体験した時の意識や空気感に沿った、複合的な要素を合わせた形で視覚化することを試みている。現代では、時代の変化と共に後世に残す多様な媒体がある。筆者の歴史に対するとらえ方は、かつて2000年代初めの東京大学のソンマ・ヴェスピアーナの発掘、2009年から2年間は、文化庁の在外研修員としてイタリアのポンペイ遺跡とイギリスの博物館において考古学者たちと日々ポンペイ遺跡や周辺の調査を行い、2017-18年には立命館大学の杉沢遺跡の発掘への参加により、目には見えないものを含む時空間を肌で感じた経験が大きい。長大な時間の其処此処には、存在した人々の個人的な物語や歴史、記憶が詰まっているはずなのだ。

私たちが日常を過ごす時、誰もが出会ってしまうささやかな出来事。当事者としては当たり前のように見過ごしてしまう、人々のさりげない日常や知恵や生き方に着目することは、今の時代を生きる私たちの日常や生き方を顧み、見つめることにもなりうる。また、記録に残された「過去」の多様な選択肢があれば、選択や価値づけを未来の人々が行うことも可能になる。そのために、今日も作り手である私たちは、ひたすら実践と奮闘を続ける。

#### 註

- 1 (引用文献) ティム・インゴルド『人類学とは何か』 訳者：奥野克己、宮崎幸子 / 亜紀書房 / 2020年3月 / p.16
- 2 AIR Onomichi  
AIR Onomichi は、広島県尾道市で活動を行なっているアーティスト・イン・レジデンス (芸術制作を行う人物を一定期間招聘し、その土地における滞在制作の支援を行

う事業) である。2007年より2021年まで17組の国内外のアーティストを招聘し、空き家問題が慢性化している尾道市旧市街斜面地を舞台に創作活動を展開してきた。AIR Onomichi の特徴は、招聘作家の選定や場とのマッチング、地域コミュニティとの関係性の構築など、在住アーティストがディレクションとコーディネートを行っていること、招聘アーティストの中長期的なプロジェクトを支援していることにある。招聘作家は、地域固有の場所の特性や来歴と対峙しながら、リサーチやワークショップ、制作、発表等を行っていく。

#### 3 家船

それぞれの本拠地 (この場合は吉和漁港) を中心として、陸に土地も家も持たず、漁業や行商を生業として周辺海域を移動しながら、盆と正月を除く1年のほとんどを漂海して過ごす人々が生活の一切をまかなう家船 (エブネ) と呼ばれる船の上で暮らしていた。明治維新の近代化の到来と共に、納税の義務化、徴兵制、義務教育の徹底などの一般庶民の管理化、文化的、物質的な生活の普及によって定住生活を余儀なくされ、現在では消滅したと言われている。

#### 4 大阪松竹歌劇団付属学校

現在の OSK 日本歌劇団付属の養成機関で1922年松竹楽劇部生徒養成所として設立。浜中初恵さんが所属していたが、空襲がひどくなり尾道へ戻り、終戦後に星劇団を作った。

#### 5 周防大島の宮本常一記念館における調査

宮本常一記念館 (周防大島文化交流センター) は、周防大島町出身の宮本常一関連資料展示室をはじめ、体験学習室や図書館などが完備された施設。故宮本常一教授は、かつて吉和の家船や漁民アパート (尾道市営アパート) に関する撮影をしている。2016年7月の調査では、学芸員の高木泰伸氏に話を伺い、蔵書が収められている書庫やアルバム等の貴重な資料を見せていただいた。

#### 6 ASP (Artist Support Project)

ジョグジャカルタにある非営利の美術制作活動・国際交流活動を目的とした施設。

2019年当時、八重潮について書かれた論文は2本あり、両方とも著者は丸山彩氏である。大谷芳久氏が見つけて送ってくれた論文は、「日本軍政下のジャワにおける歌曲募集 — 「八重潮の成立に着目して」 — (丸山彩氏・織田康孝氏の共著、2018年) で、立命館大学国際平和ミュージアムの紀要「立命館平和研究」(2017年3月) に収録されている。

8 リカルド氏が執筆したレポートの全文は、アーティストブック『親愛なるあなたへ』に収録されている。(著者：横谷奈歩、2020年発行、全28ページ)

#### 9 塩江温泉鉄道

塩江温泉鉄道 (通称ガソリンカー) は1929年から1941年までの12年間、仏生山 (ぶっしょうざん) から塩江間の約16キロを走る観光鉄道として開通し、塩江に訪れる交通手段として利用されていた。今でも塩江地区には、当時のトンネルや橋脚などの遺構が残る。

#### 10 いにしによる

この制作中の空き家に名付けられた「いにしによる」とは、「帰りに寄る」の讃岐地方の方言で、人々が集い、憩いの場所であった藤川家の歴史を表している。